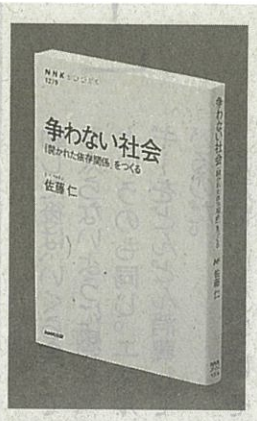
新潟日報
NIIGATA NIPPO
新潟
'23.7.30

533

争わない社会

多様な依存で孤立回避

佐藤 仁著



NHKブックス
1870円

天は自ら助くるものを助くと言われるが、本当だろうか。

著者は国際開発研究の視点から、自助努力よりも、多様な依存関係を築くことが重要だと言う。

例えば途上国への支援は、その国が自立できるようになされるべきだと言われるが、戦後日本の賠償支払いや対外支援のやり方は異なった。支援は日本企業の利益になるようにひも付けられ、相手国を日本経済に依存するように仕向けてきた。

こうした支援は「経済帝国主義」的だと批判されるかもしれない。だが、そもそも相手国が自立するための支援という慈善行為は、長くは続かない。支援といえども、依存関係を深め合うことは基本的に正しく、問題はその深め方にあるという。

著者はかつて、国際非政府組織の「中・東欧地域環境センター」に理事として参加し、環境保護を介した民主化に取り組んだ。だが、目的が半ば達成されると組織は衰退し、解散してしまった。民主化を支援し続けるために何が必要だったのか。それは、その国の方針に抗さず、しかし中央政府との距離を自律的に操るような地域社会を育てることであったという。

歴史的にみると、米国も自国の利益のために途上国を支援してきた。1960年代から80年代にかけて、タイの東北部で森林保全活動に最も熱心に取り組んだのは、米国の出先機関やフォード財団であった。背後には、タイの人々が共産党に流れないように監視するという目的があった。

支援はつまり、支援国の利益のためになされる。これを頭から批判すべきではない。問題は支援を受ける側が、複数の依存先をもつように工夫することである。依存から脱却するよりも、多様な依存関係を築き、それをその都度組み替えていく。そうした巧みな立ち振る舞いこそ、他国との争いや孤立を避ける知恵であると著者は説く。

逆説的ではあるが論理は説得的。国際社会だけでなく、人間関係全般に指針を示す好著である。

（橋本努・北海道大教授）